

医学検査用語の認知度及び理解度に関するインターネットサーベイ

◎小林 浩二¹⁾、竹内 法子¹⁾、大西 秀典¹⁾、小丸 圭一¹⁾、金子 博司¹⁾、小野 篤史²⁾、坂西 清³⁾、鈴木 英明¹⁾
北里大学保健衛生専門学院¹⁾、済生会 新潟第二病院²⁾、新潟大学地域医療教育センター・魚沼基幹病院³⁾

【はじめに】

日本臨床検査技師会は、平成 25 年に「検査説明・相談ができる臨床検査技師教育企画担当者講習会」を開催し、翌年、各都道府県において「検査説明・相談ができる臨床検査技師」の育成の研修会を実施した。このような取り組みは、診療支援だけではなく受診者サービスの向上、医療の可視化といった観点からも重要であると考ええる。一方、これら説明を受けない多くの受診者が見聞きする「検査用語」に関する理解度や認知度に関しては十分な調査が行われていない。今回我々は、受診者が目にする検査結果や検査説明書に用いられている「検査用語」に関して理解度及び認知度に関する大規模調査を行ったので報告する。

【方法】

検査用語の理解度・認知度に関するパイロット調査を事前に実施し、得られた結果から検査用語（スクリーニング検査、基準範囲、尿タンパク、RBC など）を 13 語選択した。調査は、インターネットリサーチ会社に調査を委託し、リサーチパネル総数は新潟県及び東京都に在住の合計

1000 名である。尚、本研究は学内倫理審査申請後、所属長の承認を得て実施した。

【結果】

穿刺、侵襲、溶血、感度といった用語は、50%以上認知されていない。一方、検体は 53%、心電図検査は 76.7%、尿タンパクは 57.9%に認知及び理解されていた。略語に関しては Glu、RBC は 50%以上認知されていないが、LDL に関しては 64%に認知されており、その半数以上が意味を理解していた。補足だが、医療従事者に「臨床検査技師」という職種があることを知っていたのは 62.2%であった。

【考察及び結論】

東京都医師会医療開発委員会（2011）が 1927 名の医師に調査した結果、日常診療において医学用語が原因で患者トラブルになったことがあると回答した医師は 58.8%であった。このようなトラブルを未然に防ぐためにも、今回データは、検査説明のみならず院内における検査ポスターや説明書作成の一助になると考える。

北里大学保健衛生専門学院：025-779-4511